

Prologue

はじめに

リクガメと暮らしはじめて、いろいろなことを教わってきました。彼らは、多くのことを私たちに授けてくれます。それは心の安らぎであったり、楽しみであったり、心配の気持ちであったり、驚きであったりします。一つ一つの事柄が、私たちにはみな新鮮で、かつ、わからないことばかりなので、現在も悪戦苦闘の毎日を送っているところです。

かなり以前から、リクガメは輸入もされていましたが、ヨーロッパなどで生活していた方が日本に連れて帰るといったケースもあったと思います。



人間とリクガメのかかわりの歴史は、古代ギリシャの頃にまでさかのぼって、すでに記録が残されています。ペットとしてのリクガメの歴史はヨーロッパでは大変古く、1600年代の始めの頃には、すでに飼育しているリクガメの様々な研究や観察が行なわれていました。日本では、江戸幕府が開かれた頃です。

しかし、日本では、数年前まではほとんど馴染みのない生物であったのも事実です。そこに、突然といってもよいと思いますが、ペットとしての爬虫類ブームがおとずれました。それ以前は、外国に棲息する爬虫類の飼育というのは、生き物好きの一部のマニアの間で秘かに行なわれるといった、どことなく暗いイメージを持って捉えられていたようです。ところが、静かでうるさくなく、臭いも少ないので、住宅の密集地やマンション、アパートでも飼育できますというキャッチフレーズのもとに、数多くの種類の爬虫類がペットショップに並ぶことになりました。テレビのドラマや、映画に登場する爬虫類がトレンドーなイメージを作り出したこともあり、一人暮らしの女性を始めとして、小さな子供にまでブームが広がっていきました。

そのなかにリクガメも含まれていました。リクガメは他の爬虫類と比べて、日本人には親しみやすい生き物であったため、大変多くのリクガメが日本にやってくることになりました。カメは昔から日本にも棲息していますし、イシガメ、クサガメといったヌマガメの印象も日本人にはごくごく一般的に備わっています。その結果、同じカメだから、だれにでも飼いやすく、どこでも飼育できそうだという感覚で、リクガメに接しはじめる人が多かったのも事実です。

これは多くのリクガメにとっても、せつかく愛情を持って彼らに接しようとした飼育者にとっても、かなり不幸なことでした。なぜなら、リクガメは、日本固有のヌマガメとはまったく違った種類の生きものであったからです。ちょっと飼育をはじめると、わからないことが次から次にでてくるのです。そしてそれらの疑問に対して

の答えが、ペットショップに行っても、書店に足を運んでも、獣医師に聞いても、どこにもないという事態になってしまいました。獣医学科のある大学でさえ、リクガメの診察方法や治療についての講義は行なわれていないという悲劇的な状況でした。ごく限られた生物学者や、爬虫類の研究者でなければ、国内ではまったく正しい知識を得ることができない状況でした。ましてリクガメが病気になってしまったり、ケガをしても治せる人も場所もないのに、リクガメはどんどんペットとして販売されていったのです。

結局、飼育者が自分たちで観察、研究して少しずつ知識を蓄えるしか方法がありませんでした。教えてくれる人がいないのでしかたありません。海外から文献を取り寄せて、辞書を片手にがんばるしかなかったわけです。

そんな状況から、最近は少しずつですが、事態が好転してきています。

海外のよい文献が翻訳されて出版されるようにもなりましたし、



インターネットやパソコン通信といった情報網によって、広く海外からも知識を得ることが、多くの飼育者に可能となってきたからです。獣医師のなかにも、やはり自分で海外の文献を取り寄せて研究し、リクガメを診察して下さる先生も増えてはきています。私たちも自分たちが集めた資料や文献による知識が、少しでもリクガメ飼育者のみなさんの役に立ててもらえたらと思い、インターネット上にTOR-TOISE LAND というホーム

ページを開設し、(<http://www.st.rim.or.jp/~samacha/>) できる限りの情報を発信してきたつもりでした。しかし、まだまだそれらの情報網を利用できる環境を持っている人は限られていますし、機械嫌いの人も多くいらっしゃるのも事実です。

そんな機に、日本の状況にあったリクガメの飼育のための本を出版しませんか、とのお誘いをいただきました。確かに、日本国内におけるリクガメの飼育に、海外の例をそのままあてはめるのには無理があります。また、少しずつ、様々な文献を集めれば、個々の知識を集めることが可能ですが、リクガメの飼育を総合的に扱った、何故そうすればよいのか、といった内容の本がまったくないのも事実でしたので、よろこんでお引き受けすることに致しました。

また、リクガメ科のすべてのカメをまとめて語るのには、無理がありますので、日本で比較的飼育しやすく、数も多く販売されている地中海リクガメを中心にして本書は話しをすすめさせていただきます。

決して本書の内容がすべてではありませんし、ベストと言える飼育方法がある訳でもありません。私たちは、リクガメの飼育には何がどうしても必要なのだろうという基本的なことから、本書を参考に確認していただければよいと考えています。あとはそれぞれの飼育者が、ご自分の工夫と考慮で、よりよい飼育環境を実現していただければ幸いです。

そして、リクガメとの楽しい、幸せな生活をいっしょに実現してゆけたら、とても素敵なことだと思います。

リクガメは、直接私たちに語りかけてくれるわけではありません。私たちのために、何か大きな行動をおこしてくれるわけでもありません。

でも、彼らとの生活はとても安らかな気持ちと、ほのぼのとした心を私たちに与えてくれます。私たちに探求する気持ちを奮い起こさせてくれます。生命の大切さとすばらしさを教えてくれます。私たちは、彼らに多くを与えることはできませんが、少なくとも、日

本に輸入されてきた、すべてのリクガメとその飼い主が、穏やかで
幸福な生活をおくれることを心から願っています。

多くの方々のご協力、ご助言なしでは、本書の出版は成し遂げら
ませんでした。

貴重な研究の成果をこころよくご提供してくださったうえ、栄養
学に関して多くのご助言をしてくださいました、松山東雲短期大学
の宮田富弘助教授、冬眠や産卵に関する貴重なお話や資料を提供し
てくださいました日向野研二・ブレンダご夫妻、病気に関するお話
や資料提供をしてくださいました鈴木動物病院の鈴木哲也先生、紫
外線強度計を提供してくださいました山本裕康さんに、この場をお
借りして、深く感謝の意を表したいと思います。

私たちが飼育当初から参加し、多くの情報交換ができ、また、
多くのリクガメキーパーと知り合う場を提供してくださった、パ
ソコン通信「NIFTY SERVE」のペットフォーラムの作田仁さん、



加藤英幸さん、飼い初めの時期に多くの貴重なアドバイスをいただいた成沢大輔さん、カメ専用会議室「甲羅同盟」の皆さまにも感謝の気持ちが絶えません。

また、様々な相談にこころよくのってくださいました、喜多見動物病院の樋口周平先生、鳥の病院の長屋亘先生、NATIONAL TURTLE AND TORTOISE SOCIETYのGayle Swinfordさん、TORTOISE TRUSTのA.C.Highfield博士、Jill Martin博士の諸氏にも深謝の意を表します。

さらに、本書の作成にあたり、企画から編集まで一角ならぬご尽力をいただいた山内イグアナ研究所の山内昭・多佳子ご夫妻にも、深く御礼申し上げます。また、最後になりましたが、私たちの生活を愛情と探求心で満たしてくれている8頭のリクガメたちにも、心から感謝しています。

1997年11月 森 靖
森 暁生子